

天狗

室生犀星

青空文庫

一

城下の町なみは、古い樹木に囲まれていたため、よく、小間使いや女中、火の見仲間などが、夕方近い、うす暗がりのなかで、膝がしらを斬られた。何か小石のようなものに躓^{つま}ずいたような気がすると、新月がたの、きれ傷が、よく白い脛^{すね}に紅い血を走らせた。それは鎌^{かま}いたちに違いないと人々は言っていたが、その鎌^{かま}馳^{いたち}という名のことで、赤^{あか}星^{ほしじゆ}重^う右^うのことが、どういう屋敷うちでも、口の上^{くちのうへ}にのぼった。

城下の北はずれの台所町に、いつごろから流れ込んだものか、赤星重右という、名もない剣客が住んでいた。ふしぎなことには、かれが通り合せると、必ず彼の不機嫌なときには、きまつて向脛^{むかひ}を切られた。というより不意に、足や額に痛みを感じ、感じるときは既^もう額^{かぶ}ぎわを切られていた。——それ故城下の剣客は誰一人として立向うことができなかった。大桶^{おおおけ}口^{ぐち}、犀川^{さいかわ}口^{ぐち}を固めている月番詰所の小役人達も、かれが通るとなるべく、彼を怒らせまいとしていた。それほど、女子供は云うまでもなく、中家老、年寄を初め、いったい彼が何故にあれほど剣道に達しているかということ不思議がった。が、誰一人と

して小脛を払うものさえ、広い城下にはいなかった。

それ故、かまいたちという、薄暗がりの樹の上にかがんでいる鼠のような影が、いかにも赤星重右に似ていたから、人々は、鎌いたちとさえ云えば、なりの低い、重右の姿を思い出した。――晩方^{ばんがた}、重右の屋敷へ忍び込んで見たものの話では、かれは何時^{いつ}ものよう

に普通の人なみに寝ていたが、しかし、得体のわからない陰気な顔をしていたと答えた。

かまいたちその物が、ひよつとしたら赤星重右ではあるまいかと、人々は、蒼白い晩方の店さきや詰所などで、噂し合つて気味わるく感じた。が、べつに赤星重右は不思議な人物ではない。なりの矮^{ちいさ}い、骨格の秀でた、どこか陰気な煤^{すす}皺^{しわ}の寄つたような顔をしていた。

二

城内では、得体のわからない赤星に盾衝^{たてつ}く剣客がいなかったので、かれをどうかして他の藩に追い遣るか、召抱えるかしなければならなかった。が、召抱えるということは、性の分らないこの剣客には、家老達も不賛成をした。何かの理由のもとで、何処^{どこ}かへ封じてしまつたらという発議が、城内役人の間に起つていた。というのは、どう考えても、彼自

身が何かしら憑つきものがあるような、よく町裏の小暗いところを歩いていたりしている様子が、どこか普通の人間離れしたところをあらわしていた。ことに、高塀や樹の上へ攀よじ上ることが、殆ほとんど目にとまらないくらい迅はやかった、たとえば、彼の右の手のかかった土塀では、その手が塀へい庇びにつかまると同時に、もう、塀を越えてしまっていたからである。

——そういう噂がつたわるほど、大手さき御門から西町や、長町の六番丁までの椎しいの繁った下屋敷では、鎌鼬が夕刻ばかりではなく、明るい白昼の道路にも、ふいに、通行人の脛か腰のあたりを掠かすめた、と、話すひとびとは必らずそのあたりの通りに、うす汚ない重右の姿を見ないものはなかった。では、この赤星は内弟子でも取っていたかという、そういうものは一切とらなかつた。どうして食っているかさえ分らなかつた。台所町の彼の住居は、六畳の仲間部屋しかなかった。昼も晩も寝通しでいる事があるかと思うと夜中にふいに出て行くことがあつた。

地震の珍らしいこの城下では、よく赤星が樹の上にのぼり、樹をゆすぶっていたというものさえ居た。そして地震の来るのを恐がりながら、緑葉の間から叫んでいた、と。

ともあれ、城内では、赤星重右を西方の、大乗寺だいじょうじさん山の奥峰にあたる、黒壁という山頂の小さい社やしろを中心にして九万歩の地所をあたえるという名義で、この赤星を封じること

に決議された。なぜというに、この決議からして赤星を憑きもの扱いにしていって重右がそれを承諾するかどうかを試めたのだった。ところが重右は却って喜んで、この黒壁の権現堂に上った。——が、それきり二年も三年も誰もかれの姿を見たものがなかった。雪の深いこの地方の冬をどうして越すだろうとさえ云う者も居なかった。

年に二度あて、村役人はべつに黒壁へ行きもしないで、彼の無事であることを報告するだけで、役人自身も登山しようとしなかった。いつの間にか忘れともなく、人々は赤星重右のことを口にしなかった。というのは、れいの鎌鼬に脛を切られるものが、それと前後して居なくなつたのであるから——、が、やはり重右の話が出ると、ひとびとは、憑きものより外に、どうという特別新しい考えを述べなかった。

三

黒壁権現は、断岩の上にあつて、流れを徒歩でわたると、二条の鉄鎖が下りてあつた。誰が云うとなく、権現には天狗が住んでいるというものが、次第にその数を殖^{ふや}してきた。雪の多い朝、雪を下ろしに屋根へ上つた小者が、それきり吹雪のなかに行方知れずなつた

ことや、いまのいままで居た老婆が、ふいに縁側から^{すべ}に落ちたように見えなくなったこととさえあった。それと同時に、誰がいうとなく黒壁の権現に詣^まるものが多かった。えやみや足なえ憑きものの類が、ふしぎに願をかけると癒^なるということだった。そして供物や供米^{まい}を権現堂にそなえてゆくばかりでなく、人々は、荒廃した堂宇^{どうう}に、多くの天狗の額を奉納した。それは土人形のような天狗の面を形作つた額面だった。が、ふしぎなことに、その額面に金網をかけたものに限つて取下ろされてあつたから、人々は天狗を、金網に封じることを恐れた。

が、ここに不思議なことは、権現堂で白鼠の姿を見たものは、きまって病気がなおると云われていたことと、決つてその白鼠がちよろちよろと蝕^{むしば}んだ板の間を這い歩いていることだった。いつのころと云うこともなく、白鼠が堂宇に充ちていたのである。

が、一つ不思議なことは、その人気のない堂宇に、れいの赤星重右がいつも供米や神酒に酔い痴^しれて寝ころんでいた。が、滅多につとめて自分の姿をあらわすということがなかっただけ、人々は却つて赤星重右を天狗か何かのように敬まつていたのである。なぜというに、かれは決して饒舌^{しゃべ}るようなことがなかったし、特に起きて働くということがなかった。かれは、ただ、暇さえあれば跣^{しゃが}んで唾を吐きながら居たのである。——ことに最^もつと

不思議なことは、晩、登山したものが、この堂宇の裏から陰気な犬の遠吠えとわほのような唸りうなが絶え間なく漏れてくること、それが月夜の晩などには殊に酷く吠えたけつていているということが村人につたわつていた。實際堂宇である赤星重右がおかしなことには、月夜になると断岩や樹の下へ跼んで、その蒼白い顔を空に向けて、まるで犬のように吠えているといふことが、しばしば村人の目にさえ留るようになっていた。それがために、権現の霊顯れいげんに対してこれを疑うものはなかった。

その年の秋に、赤星重右が断岩の陰つたところで、蠅のうずまきの中に、死体となつてゐるのを村人は見つけた。お城下の蘭医派らんいはの菊坂長政は、それを一種の病毒不明の、併ししかながら何等かの犬畜に犯されたらしい診断をしただけ、別に取り立てて噂うわさするものがないかつた。が、村人はこれを丁寧ていねいにその堂宇のかたわらに碑を立てた。それと前後していつの間にか神の使者であるべき白鼠の姿は次第に影をかくしてしまった。それ故、村人は赤星重右を一種の、何かふしぎな天狗の一種のような、決しておろそかにできないもののような考えを持ち、それを祠ほこらのなかに加えたのである。

四

——私はここまで話すと、客はすぐ微笑^{わら}い出し、それは詰らない極くありふれた話だと云った。

「それは全然恐犬病なんだ。はじめから特殊な精神異常者にすぎないんだ。むかしの狐憑きとかいう奴はみないまの恐犬病なんだから。」私もそれに同意した。

「恐犬病はたしかなんだ。ところが今でもその黒壁には、権現堂があつて天狗がまつてあるのだ。ことに僕の国の方ではその天狗というものが、実に流行っているのだ。」子供の時分に、すこし外が暗くなると、すぐこの天狗が出るということを、母親や近所のものから教えられた。実際どういう神社へ行つても必^きつと天狗の額がかかつていたのである。

「だから古い樹にはきつと天狗が棲んでいると云われたものだ。」

「では今でも君はそういうことがあると思つていいのかい。」そういう客に、私は頭を振つて見せ、これを否定^{いな}んだ。

「いや、ただそういう古い樹には古いと云う事^{だけ}丈が人間に何かしら陰気な考えを持たせる丈なんだ。その外には何んでもない。」

私はそういうと客と二人で、黙つて対^{むか}い合つた。古い樹というものの沈鬱な、おおい

ぶさるような枝ぶりが、私の目には暗いかげを作り、
だんだん郷里の町の方へ、私の考え
を連れ込んで行つた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星未刊行作品集 第2巻 大正※【#ローマ数字Ⅰ、1-13-21】」三
弥井書店

1986（昭和61）年12月15日

初出：「現代」

1922（大正11）年12月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年10月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天狗

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>